

## 新約聖書 マタイによる福音書 2章 13節—23節（新共同訳）

<sup>13</sup> 占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」<sup>14</sup> ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、<sup>15</sup> ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

<sup>16</sup> さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。<sup>17</sup> こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。<sup>18</sup> 「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちのことで泣き、／慰めてもらおうともしない、／子供たちがもういないから。」

<sup>19</sup> ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、<sup>20</sup> 言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」<sup>21</sup> そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。<sup>22</sup> しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、<sup>23</sup> ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

## 説教「ナザレの人」

「聖家族（せいいかぞく）」という言葉があります。これは、幼子イエス・キリスト、母マリア、父ヨセフのことを表しています。

聖家族と呼ばれるイエス、マリア、ヨセフの家庭も、決して平穏無事ではなく、波瀾万丈でした。本日の福音書には、幼子イエスの命を狙うヘロデ王の陰謀から逃れるために、ヨセフ一家がエジプトに逃げた出来事が記されています。

救い主イエスの誕生について、マタイ福音書では、一貫して父ヨセフに焦点を当てながら語られます。これは、ルカ福音書が母マリアに焦点を当てているのとは対照的です。

救い主として生まれたイエスを拝みに、星を頼りにはるばる東方から訪れた占星術の学者たちが帰ったあと、主の天使が夢でヨセフに現れました。夢の中でヨセフに天使が伝えたことは、起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げよということでした。なぜなら、生まれたばかりの幼子イエスをヘロデが殺そうとしているからです。

夢から覚めたヨセフは、天使の指示に従って、夜のうちに幼子イエスと妻マリアを連れてエジプトに行きます。いわゆる夜逃げをした彼らの状況が切迫したものであったことを思われます。突如、子と妻を連れてエジプトに逃げるとということは、相當に大変なことだったでしょう。

彼らのエジプトへの避難には、いったいどのような意味があったのでしょうか。それは、旧約聖書ホセア書（11:1）の「エジプトから彼を呼び出し、わが子とした」という預言が実現するためでした。

エジプト避難の前に聖家族のもとを訪ねてきた占星術の学者たちも、幼子イエスを拝んだあと、ヘロデのもとに帰るなど夢でお告げを受けました。そこで彼らは、別の道を通って、ヘロデのいるエルサレムに寄らずに自分たちの国へ帰って行きました。学者たちは、幼子を見つけたら報告するとヘロデとの間に約束を交わしていましたが、その約束を果たさなかったのです（マタイ 2:1-12）。

学者たちにだまされたと知って大いに怒ったヘロデは、狂気の行動に出ます。イエスが生まれたベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させたのです。この残酷な行為がどれほどの悲しみと絶望をもたらしたかは、言葉では言い尽くせないものがあると思います。

ある日、突然子供を殺された母親の悲しみが、18 節に語られています。「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちことで泣き、慰めてもらおうともしない、子供たちがもういないから」。

この嘆きは、預言者エレミヤが語った預言の実現だ、とあります（マタイ 2:17、エレミヤ 31:15）。ラケルとは、イスラエルの民の母である人です（創世記 30:22-24 と 35:16-18）。ラケルが、「子供たちがもういない」ことを嘆き悲しんでいる。イスラエルの母ラケルの嘆き悲しみが、ヘロデ王に子供を殺された母親たちの悲しみと重ね合わされているのです。

のちにヘロデ王が死んだあと、イエスの一家は天使のお告げによってイスラエルに戻り、最終的にナザレという町に行って住みました（マタイ 2:23）。それは、「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言っていたことが実現するためでした（マタイ 2:23）。イエスが実際にナザレに住み、「ナザレの人」と呼ばれるようになったことで預言が具現化したのです。

本日の福音書には、幼子イエスにまつわる出来事が旧約聖書の預言の具現化であると、3回にわたって記されています（15 節、17 節、23 節）。

今年最後の礼拝である本日の福音書には、あまりにも痛ましく悲惨な出来事が記されています。この出来事は、自分の地位に固執するヘロデの不安や恐怖、そして暴力性によって引き起こされた出来事でした。

聖書はヘロデの姿を通して、人間の罪をあらわにしています。そして聖書は、単に人間の罪と、その罪の結果を見つめているではありません。聖書は人間の罪を示しながら、人間の罪の歴史の中に、イエス・キリストが救い主として来られたこと、イエス・キリストが私たちの平安であることを伝えているのです。

子供を失い激しく嘆き悲しむ母親は、もはや慰めさえ願わないというエレミヤの預言はこう続きます。「主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。息子たちは敵の国から帰って来る。あなたの未来には希望がある、と主は言われる。息子たちは自分の国に帰って来る」（エレミヤ 31:16-17）。

主なる神は、嘆き悲しむ母親に、慈愛をもって語りかけます。そして、あなたの苦しみは報われる、連れ去られた息子たちは敵の国から帰って来る、あなたの未来には希望がある、と告げているのです。慰められることを拒むような深い悲しみの現実の中にも、神のこのような救いと希望の語りかけがあることを、聖書は私たちに伝えます。

聖書の中には、「喜び」という言葉が繰り返し使われます。喜びという言葉は、一見すると苦しみや悲しみとは反対の言葉のようですが、決して水と油のように永久に弾き合うわけではありません。喜びは、苦しみや悲しみと相反せずに、溶け合いひとつになることができるのだと思います。

私たちは、自己の内にある苦しみや悲しみ、他者の苦しみや悲しみを無かったことにするのではなく、それらを包み込みながら、心が喜びにあふれることができます。

そして私たちはその喜びによって神を賛美し、祈りと共に、苦しんでいる人・悲しんでいる人、苦しんでいる自分・悲しんでいる自分に心を開きましょう。

今年も残すところ、あと4日となりました。あと少しで終わる2025年を、私たちは希望と共に過ごしていきましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。この一年、私たちがあなたと共に歩むことができたことを感謝します。自分の力ではどうすることもできない事態に直面したとき、私たちの思いを超えて関わってくださるあなたの救いに、私たちが自らを委ねていくことができますように。御子イエス・キリストによって祈ります。アーメン

\* \* \* \* \* 説教ここまで \* \* \* \* \*

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

### 旧約聖書 イザヤ書 63章7節—9節（新共同訳）

<sup>7</sup>わたしは心に留める、主の慈しみと主の栄誉を／主がわたしたちに賜ったすべてのことを／主がイスラエルの家に賜った多くの恵み／憐れみと豊かな慈しみを。<sup>8</sup>主は言われた／彼らはわたしの民、偽りのない子らである、と。そして主は彼らの救い主となられた。<sup>9</sup>彼らの苦難を常に御自分の苦難とし／御前に仕える御使いによって彼らを救い／愛と憐れみをもって彼らを贖い／昔から常に／彼らを負い、彼らを担ってくださった。

### 新約聖書 ヘブライ人への手紙 2章10節—18節（新共同訳）

<sup>10</sup>というのは、多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創始者を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の目標であり源である方に、ふさわしいことであったからです。<sup>11</sup>事実、人を聖なる者となさる方も、聖なる者とされる人たちも、すべて一つの源から出ているのです。それで、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、<sup>12</sup>「わたしは、あなたの名を／わたしの兄弟たちに知らせ、／集会の中であなたを賛美します」と言い、<sup>13</sup>また、／「わたしは神に信頼します」と言い、更にまた、／「ここに、わたしと、／神がわたしに与えてくださった子らがいます」と言われます。<sup>14</sup>ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、<sup>15</sup>死の恐怖のために一生涯、奴隸の状態にあった者たちを解放なさるためでした。<sup>16</sup>確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハムの子孫を助けられるのです。<sup>17</sup>それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。<sup>18</sup>事実、御自身、試練を受けて苦しめたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。

教会讃美歌 13番「ヨルダンの岸辺にて」、151番「ひとの目には」、256番「すがたは見えねど」、4番「主はわがのぞみ」。